

<第38回学会大会 ワークショップ>

第一話. 中越地震災害復旧のレクリエーション支援体制づくり
— 心のケアを中心に —

鈴木 允¹

**A report on the recreation support system for stricken areas by
the chuetsu-earthquake : Attaching importance to its mental care**

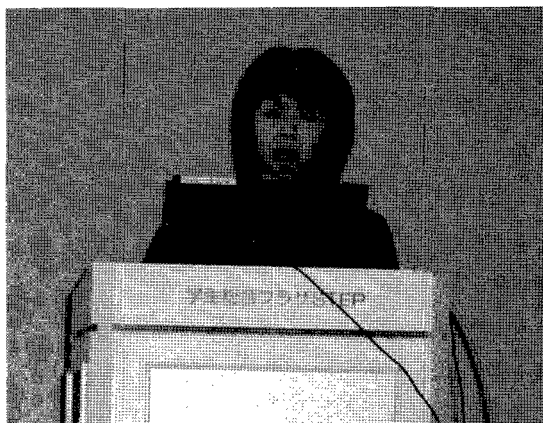
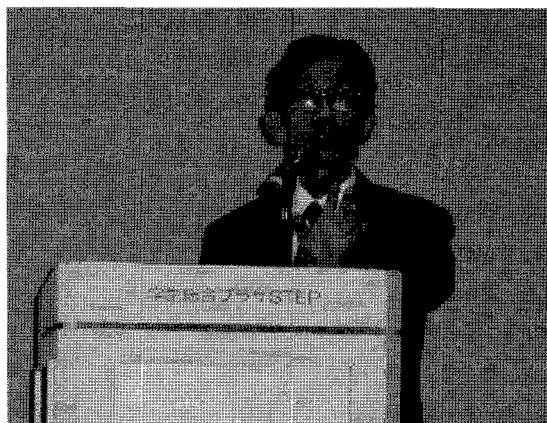
Makoto Suzuki¹

第二話. 地域と学生を繋ぐ教育活動の実践
— 教育の特色を生かしたレクリエーション・サービス —

坂内 寿子²

**A report of educational practices that guide students
to community recreation services**

Hisako Bannai²



1 新潟レクリエーション協会 Niigata Recreation Association.

2 新潟中央短期大学 Niigata Chuoh Junior College

< 第一話 > 中越地震災害復旧のレクリエーション支援体制づくり

— こころのケアを中心に —

新潟県レクリエーション協会理事
レク・コーディネーター

鈴木 允

1. はじめに

中越地震が発生したのは、平成16年10月23日のことでした。当時の様子は口では言い表せないほどに被害がひどく、何も考えられず、マスコミから情報を得るのに精一杯でした。表1は震災があった後、すぐ非難した場所です。

私が今日お話しするのは、山古志村が中心ですが、当時の様子を聞いてまとめると主に8箇所へ皆さんが非難したことが分かります。

平成16年の11月1日から15日の間に仮設住宅が各地で完成しました。入居を始めたのが12月10日から20日の間です。(ちなみに仮設住宅退去は、その2年後の平成19年12月31日です。)

山古志村の人たちが入った仮設住宅が表2の5箇所です。今日お話しするのは、私たちレクリエーション協会がタッチした陽光台ABCという3つの仮設住宅です。これら3つに約350世帯の入居がありました。

災害発生から1ヶ月間は、レクリエーション・ボランティアとしてどんなことが可能なのか、手探りでした。しかし県ボランティアセンターからは、活動応援への協力依頼をいただき、受諾の申請手続きを取りました。

さて間近でこのような大きな災害が起きた訳ですが、当初は何をすべきか、考えても出てきませ

表2 応急仮設住宅入居者世帯数

青葉台応急仮設住宅	約 120
新陽応急仮設住宅	約 170
陽光台仮設住宅(A)	約 350
陽光台仮設住宅(B)	
陽光台仮設住宅(C)	

んでした。瓦礫の整理だとか力仕事であるとか、そういうのは浮かんでくるんですが、はたしてレクリエーションとして何をやったら良いのかと、随分と迷ったり悩んだりしました。

12月に入る頃だったでしょうか、(財)日本レクリエーション協会(日レク)より、早急に支援できる体制をつくって欲しいと依頼がありました。それで県のレクリエーション協会の専務理事とか事務局が東京に行ったり、それから日レクの皆さんが私たちの事務局へおいでになったりすることで、支援事業の大枠について十分な協議が行われました。そしてこの事業を運営するには、中越地震災害レク・ボランティアのコーディネーターを置き、これを中心に十分な活動をするようにとすることになりました。私とその役目を言いつかつた為、計画及び資料の作成に入りました。

こうしたレクリエーション協会との関係で活動を開始するまでの経過をまとめると、次のようになります。

- ・ H16.11月上旬：報道を通じて災害情報収集
- ・ H15.11月中旬：県ボランティアセンターへ活動応援受諾の手続き
- ・ H16.12月1～8日：日レクとの協議および支援事業の大枠づくり
- ・ H16.12月後半：県社会福祉協議会との情報交換
- ・ H17.1月中旬：災害地へ赴き情報収集および趣旨説明。(教育委員会、社協、ボランティア・センター)

表1 最初の避難場所(8箇所)

長岡大手高校	体育館
長岡大手高校	済美会館
長岡高校	小体育館
長岡高校	栖風会館
長岡工業高校	セミナーハウス
長岡市 教育センター	
長岡明德高校	体育館
長岡市高齢者センター	けさじろ

- ・ H17. 1月中旬：有資格者及び県レクリエーション協会加盟団体への呼びかけ
- ・ H17. 2月中旬：活動開始（川口町、小千谷市、山古志）

12月後半になって、趣旨説明に必要な資料及び災害地の現状把握のため、県社会福祉協議会へ出向きました。その時点の回答では、レクリエーション・ボランティアの活動は、もう少し後にしたらどうか、現在は現場の整理や避難所での生活面での活動が主になっているとのことでした。翌年1月中によく、災害地の教育委員会、社会福祉協議会、ボランティア・センターを訪問し、趣旨説明をして回ることができました。あとは依頼を待つばかりでしたが、その間にレクリエーション有資格者を中心に、加盟団体に参加者を募る作業をすすめました。

その結果40人の個人・レクリエーション協会へ加盟する団体で、各市町村のレクリエーション協会やフォークダンス連盟などの団体が14団体、人数でいうと計144名の応募がありました(表3)。

< 14団体は以下の通り >

1. 県福祉レク・ワーカー協会、 2. 新井市レク協会、 3. 県ターゲットバードゴルフ協会、
4. 新津市レク協会、 5. 県バタンク協会、 6. 佐渡レク協会、 7. 日本キャンプ協会、 8. 県ドッジボール協会、 9. 新潟市レク協会、 10. 県フォークダンス協会、 11. 村上市レク協会、 12. 日本3B体操協会新潟支部、 13. 十日町ネイチャーゲーム協会、 14. 新発田あやめ会

私は、応募して下さった方たちに、主旨を詳細に説明しました。活動は、仮設住宅へ全員入られて、やや落ち着いたという場面です。平成17年2月中旬になって、レク・ボランティアの依頼が入り始めました。川口町の小学生や高齢者を対象にした依頼を皮切りに支援が開始されました。他に母子家庭対象のものもありましたが、多くは高齢者対象でした。12月以後は、3つの応急仮設住宅（陽光台A、B、C）に入居した350世帯の

高齢者を対象とする活動に絞られる結果になりました。

2. 活動開始（仮設住宅入居後）

入居前は、依頼のあった時点でボランティアグループにレクの出前というキャッチフレーズで行ってもらっていました。巡回中にどの地区でも感じたことは、急に今までと違った人達といることもあって協調性に欠けていることでした。したがって話す機会も少なくなっていました。また雪の多い土地柄もあり、狭い仮設住宅にいて身動きがとれずにいる方達が大半でした。災害のショックで生気がなく、少しも笑顔が見られませんでした。

そこで陽光台A、B、Cの仮設住宅でのレクリエーションを始める前に、一応以下のような「4つの活動のねらい」を共通理解した上で、支援に当たってもらいました。

「活動の4つのねらい」

- イ) 心のケア…話す機会もなく精神的にも苦しんでいる人には、話を聴くことを優先する。癒してあげられないか。
- ロ) 地域の茶の間の機能を生かす…家族と気楽に過ごしているような雰囲気作りをしよう。
- ハ) 遊びの城づくり…子ども達が帰村後寒い住宅の中で寂しく家族の帰りを待つことがないように支援しよう。事故防止にも支援を。
- ニ) 帰村後の地域づくり…帰村後、高齢者も協力して、災害以前よりもすばらしい、村づくりが出来るような気持ちを育てよう。

各仮設住宅には集会所がありまして、そこで集会できるようになっています。そこでの集会は、全員に本当に全く笑顔がなく、下を向いてお茶を飲んで、何にもしゃべっていません。社会福祉協議会の方とかボランティアの方が話しても、返事があまり戻ってこないような雰囲気でした。心のケアをしなければならぬと思いました。

遊びの城づくりとは、学校から帰った後鍵っ子になっている子ども達を、事故などが無いように、それから非行に走ったりしないようにというような観点から、自分たちの町内でお預かりして、そ

表3 登録者・登録団体数

個人	加盟団体	総人数
40名	14団体	144名

こでレクをしたり、それから軽スポーツ的なものをするという事業です。この被災地でも、この事業が出来るのではという話がありましたので、これもねらいの1つに挙げさせてもらいました。

活動の進め方に関しては、およそ次のような点に留意しました。まず第1には、ボランティアグループは交代で支援するようにしたことです。第2には、定期的に巡回するようにしました。第3に、当日担当したグループから、次回の担当の引き継ぎを、コーディネーター経由して連絡し、円滑な引き継ぎが実現するように心がけました。そして第4に記録用紙には、出来るだけ正確かつ具体的に、内容や反省点や出てきた要望などを記入するようにし、それを事務局に提出するようにしました。

3. 活動の内容

今度は、活動の内容についてお話したいと思います。どんなことしたかということです。活動の内容は、結果的に、中には充分できなかったものも出ましたが、以下の9つくらいのことを最初予定しておりました。

①お茶会

災害時の話はださないで、食べ物の話など差しさわりのない内容でお茶を飲むのが主です。一度災害の時の様子を聞いてしまい、利用者が涙を流す場面に遭遇したので、この話題を避けるようにしました。

②話を聴く

支援する方たちは、話のきっかけをうまくつかみ、なるべく、聴くことに徹することに気を遣いました。月日がたつにつれ世間話的な内容ではあるが、徐々に話をする利用者が増えてきました。

③歌を歌う

季節の歌、昔歌った歌などを交えて、みんなで歌いました。この活動は月日がだいぶ経過してから徐々に始めました。懐かしそうに歌っておられた姿が、今でも目に浮かびます。

④軽い運動

閉じこもりがちで、あまり身体を動かす機会がないので、身体の機能を維持するため、音楽に合わせて指の運動などを、毎回継続しました。

⑤折り紙

指の訓練等を兼ねて、簡単な折り紙で楽しむようにしました。

⑥ダンス・ゲーム

身体を使ったり、脳を働かせたりとダンスを楽しみました。

⑦手料理の持ち寄り、作り方の話

気持ちが落ち着き始めると、自分の得意とする手料理を持ち寄り、作り方などいろいろ話題が豊かになってきました。気持ちの余裕も出てきたようです。

⑧遊びの城

一回だけ子ども達に、ニュースポーツなどで楽しんでもらったのですが、その後タクシーを使つての塾通いが始まったため、中止となりました。

⑨帰村後の地域づくり

これは、支援者としての最終目的です。

以下からは、活動場面や、レクリエーション・ボランティアの一コマを、写真によってご覧いただくことにします。

まず写真1ですが、入居されてから退去されるまでの半分くらいのとこまできた頃でしょうか、いよいよ楽しそうに遊べるような雰囲気ができあがり…皆さんがそれぞれ、あっちにもグループ、こっちにもグループという具合です。この皿の上に丸いものを置いては、箸で掴んで…というようなゲーム。それも顔を見るとだいぶ楽しそうな表情も出てきていたなと思っております。

写真2は歌を歌っているところです。季節の歌を、初めのうちは歌っておられたようですが、落ち着いてくると「千の風になって」などは、歌詞



写真1 笑顔が見え始めたころのゲーム



写真2 「千の風」をリクエストし歌っている

もいいし、自分たちも歌いたってという要望がでて来ました。それで高齢者には小さい字は見えにくいだろうと、大きく部屋中眺めまわすような字を書いていただいて、みんなで「千の風になって」を歌っています。

写真3はお茶会の様子です。具合の悪いところはなさそうとか、それから、顔の表情がちょっと柔らかくなっているとか、そういうところを見ながらお茶飲みをします。まあそれが大事なことだと思いつつ、見守っていました。

テーブルには御馳走が並んでいます。各自一品くらいなのですが、家族の若いのが送ってよこしたとか、もらったので作ったとか、皆さんが食べてもらおうと持ち寄ったものです。大抵は、このようにおでんが並んでまわりでお茶会兼食事会みたいな格好になりまして、それで話がまたずっと、ずっと続いていました。

写真4ですが、いよいよ退去しなくてはならな



写真4 災害以前の山古志を思い出し盆踊り練習

くなった時に、地域のことを思い出して、盆踊りをしたいというグループがありました。盆踊りを私たちに教えてくれて、立場が反対になりました。

また盆踊りの練習を始めたところ、行政にお話をしてくださって、その折衝の結果、ついに国営公園の駐車場で写真5のような盆踊り大会を開催することができました。皆さんが段々に段々に、地域のことを想い、考えるようになってきました。

写真6は、村に帰った後、新しい山古志村にできた建物の茶の間で行われたお茶会の様子です。山古志村に帰ってからも、いろいろなイベントがありました。「ありがとうございます感謝する会」とか…。おかげさまで、ふきのとうというグループが支援してあげたグループの方は、年寄りのかたが自分の家で作った味噌だとかを積極的に売っています。若い人たちの事業にも参加。協力して、今は



写真3 気持ちが解放された後のお茶会



写真5 行政を動かし希望がなかった盆踊り大会



写真6 帰村後に新会場でのお茶会

とっても明るく過ごしています。

3. まとめ

今回の被災者対象のレクリエーション・ボランティアは、全て初めての経験だったため、相当苦労されたり、悩んだりしたとの報告が幾つもありました。そこから得られた教訓を、以下のような3点にまとめておきたいと思います。

(1) ころの栄養士であること

・笑顔のない方たちに、無理に何かをしておうとか、笑ってもらおうという考えは通じない。仮設住宅での生活をはじめ、世間話でもし

ゃべって、気持ちを楽にしようとしている心理を読み取り、よく聴いてやることの大切さが判った。心に栄養を与えてやることは大切である。

(2) 対象者により目的をしっかり持ち、支援すること

・その場だけの楽しさだけではいけない。
・家に帰ってからも、楽しさが続き、生活の糧になること。心が和らぐものでなければいけない。

・長い道のりかもしれないが、「いつかはきつこうなって欲しい」という支援者なりの目的をもって接すれば、いつかは達成することの大切さ。

(3) 信頼されることの大切さ

・この人は、自分たちと同じ仲間なんだ、いつも自分たちのことを、真剣に考えてくれてるんだという信頼が大切である。

以上の3点のが、活動を続けるレクリエーション支援者にとって必要な条件であると感じました。最後に、この3点を守って支援を続けているボランティア・グループ「タンポポ」に感謝しつつ、報告を終わりたいと思います。